



# ～矢作川の活気を取り戻すためのオオカナダモ除去～

## 矢作川環境を守る会

### 地域の特徴

矢作川は、長野県南部の大川入山を源とし山間部を貫流し、愛知県の中央部を南西に流れ、矢作古川を分派して三河湾に注ぐ延長約 118km の一級河川である。矢作川の中・上流域は、天然アユやアカザ等の魚類やカワセミやヤマセミなどの鳥類、タヌキやカワネズミ等の哺乳類、キイロヤマトンボ等の昆虫類など数多くの生き物が生息している。特に矢作川漁協管内はアユの好漁場となっている。



### 活動の背景及び活動方針

矢作川では 2007 年頃からオオカナダモが漁協管内下流部で目立ち始め、特に平戸橋から久澄橋の間で大繁茂がみられた。オオカナダモは南アメリカ原産の水草で日本には自生しておらず、植物実験用に持ち込まれたものが、1940 年には野生化していたと考えられている。



オオカナダモの河川内での繁茂は、アユ釣りの障害となるだけでなく、アユの餌となる付着藻類の生育を阻害する。そのため、アユの資源への影響が懸念されたことから、その対策が検討されることとなった。

このような背景から河川の健全な河川環境を回復させるために、2010 年から組織的にオオカナダモの駆除を開始し、2013 年には「矢作川環境を守る会」を発足し現在の活動へと至っている。

活動方針は、繁茂しているオオカナダモを除去し河川内の環境の改善を行う。また、河川敷の清掃活動や地元小学生等を対象としたアユの放流や環境学習を行い、河川環境の保護と環境保全に対する意識の向上を図る。

### 活動実績

#### ①オオカナダモの除去とモニタリング

除去活動は手作業が主体だが、深いところでは重機を使用して行っている。除去活動は、アユの游漁期間外に実施するため、寒い時期の作業となり、活動する人たちの負担は大きい。



モニタリングでは、活動当初は船等を使用し、オオカナダモ分布を目視観測していた。しかし、労力の軽減、また、より高い精度での分布調査が課題であったことから、2018 年度からはドローンを使ってモニタリングを行っている。

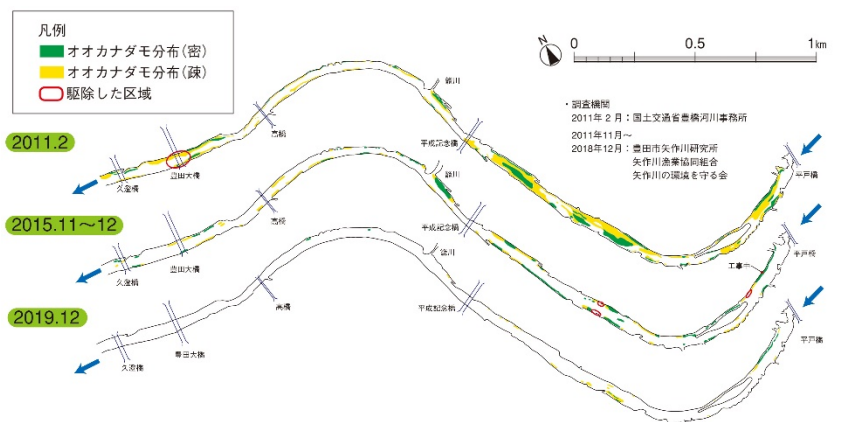
#### ②環境学習及びアユの放流体験

環境学習及びアユの放流体験は、地元の小学生と園児を対象に実施している。アユの放流体験は、多面的事業以前から継続的に行っている取り組みで、恒例行事として地域の住民に受け入れられている。また、放流体験とともに行う環境学習では、矢作川研究所の職員が講師となり、アユの生態や川の環境についてなど講習する。放流体験の内容に合わせて、より効果の高い学習内容となるよう工夫している。



### 活動の成果と課題

オオカナダモの分布の推移を抜粋して見ると、活動初期（2011 年）は特に活動区域の上流域で大量繁茂していることが分かる。しかし、オオカナダモの除去活動を進めたことで、2013 年頃から上流域の分布は大幅に減少し、2015 年は全域で減少した。その後、継続した除去活動により 2018 年には、活動区域の全域でオオカナダモの分布はほとんど見られなくなり、2019 年も低位で安定している。



当該地区ではオオカナダモの繁茂や河川敷の荒廃などもあり、一時期、アユ釣りの遊漁者数は低迷していた。しかし、オオカナダモの除去活動により、アユの餌となる藻類が増え、アユも増加傾向にあると認識されたことから、現在はアユ釣りを楽しむ遊漁者が大勢訪れるようになった。釣り人からは、河川内のオオカナダモが減少したことにより、「釣りがしやすくなった」等の声が聞かれるようになった。また、河川敷の清掃活動により、景観が大きく改善し、矢作川の親水性が向上している。

アユの放流体験及び環境学習では、自然と触れ合うことにより次世代へ川の環境や自然を守る大切さが引き継がれている。

今後の課題としては、オオカナダモの除去活動がアユ釣り期間外の寒い時期に行っているため、参加者への負担が大きくなっている。また、河川内の作業では、転倒する危険性があるため、より安全性や除去効率を高める手法を検討する必要があると考えている。